

人や理念に対する評価が変われば、その価値や価格も変わる可能性があるのです。

しかしながら、無作為な造作物の中には「途轍もない美」を宿す物があることも事実であり、それは、ピアノリストやバイオリンリストが名演奏後に「何かの力に弾かされた。」と語るように、人智を超えたエネルギーによって成される「美」が存在することも事実でしょう。

エネルギーという観点

「理の美」をエネルギーという視点で捉えれば、たとえ無作為な創造物であっても、その中には「神のいたずら」のような「美」のエネルギーを宿す物があると、私は考えられています。例えば、「民藝」の中の農器具のように、無作為な人のエネルギーによって

生まれ、その機能美ばかりでなく、人の手ずれなどの経年変化によって素晴らしい姿形となり、「途轍もないエネルギー」を宿すものが存在するのです。

「理の美」とは、このような炎の力や経年変化などによって生まれたエネルギーと同調できる特定の人々の「美」なのです。しかしながら、農機具などの手ずれなどは、特定の人が「美」と認めた時点の「美」であり、数ヶ月前、または、その数ヶ月後には、ただの古い実用品でしかない場合もあることも理解する必要があります。

さらに、同じ「民藝」の中でも、利休や宗悦の精神的な後継者である、楽吉左衛門や古田織部、浜田庄司や河井寛次郎などによって成された「美」は、彼らが感応した無作為の「美」のエネルギーを、彼らのエ

ネルギーで具現化したものであると理解して
います。これらは一見「人の美」であり
ながら、彼ら自身がそれぞれの「美」の波
長と同調することによって作り上げた「美」
の世界であると考えています。

「美」の評価と価値

第二章でお話しした三つの「美」を簡単
に振り返れば、「天の美」とは「美」のエネ
ルギーがそれぞれの存在に直接降りた物、
「人の美」とは人に降りた「美」のエネル
ギーによって成された物、そして「理の美」
とは「美」のエネルギーが降りた人が取り
上げた物と言ひ換えることができるでしょ
う。

そして、すべては「天の美」に始まり、「人
の美」はその制作における技術と意識を極

めることで「天の美」に近づき、また経年
変化などの「神のいたずら」によって素晴
らしい姿となった「理の美」も「天の美」
に帰結すると考えています。

この第二章で「美」を三種類に分けてお
話した理由は、皆様が鑑賞、蒐集してお
られる「美」が、どのようなエネルギーに
よって成されたかを理解していただくこと
で、「美」の鑑賞と蒐集の意味を改めてお
考えいただきたいという思いからなので
す。何故ならば、現在の美術品や古美術の
評価や蒐集が、他人や第三者の価値観や評
価、マスコミの情報や金銭的な価値に翻弄
され、「美」それ自体の理解や評価が疎かに
なっていると考えるからなのです。